

## 【東京】「自分の興味に誠実でありたい」教授昇進を断って開業医・産業医・経営者の道へ-竹宮孝子・竹宮医院院長に聞く◆Vol.2

2022年10月7日(金)配信 m3.com地域版

東京女子医科大学で長く研究に取り組んできた竹宮孝子氏は2021年に大学を辞め、現在は開業医・産業医・経営者という三つの顔を持ちながら予防医療の普及に力を注ぐ。教授昇進の誘いもあったというが、なぜ竹宮氏は辞職を選んだのか。そして今、「少しでも自分を見つめる時間をつくってほしい」と同業の医師に伝えたい理由は。（2022年8月12日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——先生は大学で長く臨床、研究、教育に携わった後、退職されます。教授昇進の誘いもあったそうですが。

私が東京女子医科大学を退職したのは2021年3月です。辞める前は看護学部基礎科学准教授や同大総合研究所（現総合医科学研究所）の施設長を務めており、教授就任の打診を受けていました。理事長や学長から「看護学部で教授になり、医学部と看護学部の学生を教育してくれないか」とお話ししていました。やりがいのある仕事だと思いつつも悩みましたが、大学を去る決断をしました。

退職時の私は55歳です。精力的に働ける期間を「今後10年」と設定したとき、「今わくわくすることに力を注ぎたい」と思ったんですね。私は学生時代から公衆衛生に関心があり、1997年に基礎研究を始める前から産業医としての活動を細々と続けていました。医療は病気になる前に予防すること、病気になったとしても早期に発見・治療することが大切ですが、中には病気になる方へ、病気が悪化する方へ向かってしまう人たちがいます。「どうしたらそのことに気付いてもらえるだろう」と疑問を抱えていたことに加え、小中学校の同級生が50歳で急死したショックな出来事もありました。「予防医療に貢献したい」思いが高まっていました。

予防医療はフィールドワークが重要であり、実地で成果を上げる必要があると私は考えています。成果につながりづらい理屈っぽい予防医療をするのは抵抗があったので、大学を辞め、現場に出ていく選択を取りました。



竹宮孝子氏（本人提供）

——先生は退職後すぐに「竹宮医院」（練馬区）を引き継ぎます。クリニックをフィールドワークの場にしたいと考えたのですか。

クリニックはその場の一つです。竹宮医院は私の祖父母から続く診療所であり、母が中心となって運営していましたがもう90歳に近い年齢です。高齢のために私が本格的に院長職を継承することにしたわけですが、予防医療への貢献は診療所勤務や産業医活動だけでなく、事業展開することでも可能だと考えています。

私は2018年、「街の医務室チーム」をコンセプトに据え、株式会社Machiim（マチーム）を立ち上げました。展開したかった事業の柱は、中小企業への産業保健拡大です。従業員が50人以上いる会社は産業医による健康管理が義務付けられていますが、それ未満のところは努力義務に留まっているため、導入例はあまりありません。医療者が介入していないために健診結果が放置されているなど大企業に比べてヘルスリテラシーが低くなりやすいと問題意識を抱えていたため、中小企業のサポートをしたい思いがありました。あとは個人を対象にセミナーなどを通して予防医療の知識を共有したいとも考えていました。

——開業医や産業医だけでなく、事業者としても病気の予防に貢献していきたいと。

はい。経営は素人だったので専門的な講座に通うなどして自分なりに勉強したのですが、学んだ理論と実践がうまくかみ合わず、収益化できるようになってきたのはここ最近です。

現在は整体やマッサージ、カウンセリングなど健康産業に関わる人を対象としたコンサルティングも行っています。これらの職種の人たちは競合が多く差別化が難しいため、私が産業医として培ってきた健康に関する知識と方法を提供しています。医師一人ではできることが限られますが、事業を絡めることでより広く病気の予防に貢献できるのではないのでしょうか。

——竹宮医院での診療や産業医としての活動にオンライン診療を活用していると聞きました。

オンライン診療は有用なツールだと感じています。以前はへき地や離島などで行う「遠隔地診療」の意味合いが強かったのですが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行によって初診から診療できるようになったことで利便性が増しました。クリニックの患者さんに活用できるだけでなく、産業医としても役立っています。

例えば企業の社員の方とオンライン面談を行っているとき、診療が必要な場合は近くの医療機関を受診するよう伝えるしかありませんでした。産業医が行うオンライン面談では診療はできません。当院がある練馬区に来ていただければ私が診療できますが、対象者がクリニックの近くに勤めていたり住んだりしていることは少なく、医療受診につながるということがあったのです。しかし、今は面談で診療の必要性を感じればオンライン診療を案内できます。産業医の可能性も広がったと思います。

——最後に、読者である医師にメッセージなどあればお聞かせください。

大学を辞める前は後悔しないか不安に思うことがありましたが、幸いなことに今までそう感じたことはありません。大学にいたころはどことなく余裕がなく、常に何かに追われている感覚がありましたが、今は自由な時間が増え、人間らしい生活を送れているように思います。

もちろん、大きな組織にいるからこそできることは多くありますし、その中で自分の役割を全うしようと尽力されている方々は素晴らしいと思います。しかし、長い医師人生の中で、少し立ち止まって自分を見つめる時間があったのも良いのではないのでしょうか。

医師の仕事は合理性や生産性を求められやすく、いわゆる「優等生」でいなければならない場面が多々あるように思います。そのため、知らず知らずに人間としての生身の自分にふたをしてしまっていることがあるかもしれません。

「これは本当に自分のしたいことだろうか」「自分はどうかありたいのか」——。そう問い、親や周囲の目、世間体などを取り払ったときに出る答えを見つめてみるのも良いのではないのでしょうか。

◆竹宮 孝子（たけみや・たかこ）氏

1990年東京女子医科大学卒。同大学院内科系を修了後、1997年に同大第一生理学教室助手。同大総合研究所施設長や看護学部基礎科学准教授を務めた後、2021年に退職。現在は祖母母から続く「竹宮医院」（練馬区）の院長や産業医、健康コンサルティングなどを行う株式会社Machiim（マチーム）の代表として活動する。

記事検索

ニュース・医療維新を検索

